

論文審査の結果の要旨

氏名 水谷^{みずたに}隆之^{たかゆき}

本論文は、西鶴の門人であり、俳諧師・浮世草子作者として活躍した北条団水（1663～1711）の、小説・俳諧・啓蒙的学問書にいたる幅広い作品の特色を、西鶴や出版書肆との関係に力点をおきながら解明したものである。本書の構成は、第一章「団水の初期作」が「団水の初期作―『諸宗鉄槌論』『好色破邪頭正』作者考証―」等の二節、第二章「西鶴と団水」が「『懷硯』巻一の四「案内しつて昔の寝所」について」等の四節、第三章「団水作の出版」が「八文字屋興隆期の団水」等の二節からそれぞれ成る。

第一章は、従来、団水の若年時の作か否かで研究者の見解が分かれていた『諸宗鉄槌論』および『好色破邪頭正』の両作について、新たに指摘した『津金寺名目』『しづ団返答』等の様々な典拠や、団水の他の作品との詳細な比較検討を通じて、この両作品が団水の著作であることを確定し、また先行文献を手際よく引用・編集して一書を成す団水の執筆方法を明らかにする。

第二章は、団水の俳諧・小説の師にあたる西鶴の浮世草子作品や俳諧作品を取り上げ、その特質を考察するとともに、西鶴と団水の協調的な関係の実態を解明する。具体的に言えば、西鶴の『懷硯』中の一話を詳しく分析し、社会的倫理と夫婦間の倫理の相克があることを指摘し、また西鶴の好色物諸作の女性像に検討を加え、誠を貫く女性像と私情・私欲に流される女性像が複眼的に描かれていることを指摘する。さらに、ともに可休の『誹諧物見車』への反論書である団水の『特牛』と西鶴の『石車』を取り上げ、両書には一見意見の食い違いがあるように見えながら、しかし総体としては惟中の俳諧寓言説の部分否定、また宗因風の発展的継承の姿勢など、団水と西鶴は共通の俳諧観を持つこと、また京都書肆の西鶴作品の刊行には、団水の関与があることなどを明らかにする。

また、第三章は、従来、初版の版元が不明であった『野傾友三味線』をとりあげ、それが江戸の万屋清兵衛であることを明らかにし、あわせてこの出版から京都の上村平左衛門が手を引いたことが、その後、柏屋勘右衛門と団水の提携が深まるきっかけとなったことを指摘する。さらに、団水作『本朝智恵鑑』の典拠を新たに明らかにした上で、まとめりを欠いた章構成のありかたを吟味し、刊行を急ぐ書肆の意向の結果であると結論づける。

従来の団水研究は、西鶴との関係についての伝記的な事実の解明にかたより、団水自身の著作に関しては、浮世草子のいくつかを除いてほとんど研究は進捗していない。本論文は、従前の研究では等閑視されていた団水の啓蒙的・学問的著書や俳諧を主たる考察の対象とし、資料の博搜と正確な作品解説により、特に団水作かどうか意見が分かれていた初期作二作を、団水作と確定し、その著述の方法を明らかにしたところに画期的な意義がある。また、西鶴との関係も、俳壇事情や出版界の事情を視野に入れることによって、新たな両者の関係を明らかにしている。部分的に論述がやや錯雑としている箇所もあるが、未検討であった団水の初期作や書肆との関係を初めて明らかにしたところは、高く評価できる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと判断する。